

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2021年3月20日

No.135



府中市内に設けられた競歩折返し点（1964年10月18日 現緑町）

もくじ

- 1-2 1964 東京オリンピックと府中
その4…府中市民とオリンピックの記憶
- 3 府中の都市動物 BLACK LIST ③
糞害に憤慨？
- 4-5 NOTE 府中の都市動物 BLACK LIST FINAL
外来種は善か悪か…3種の審議
- 6 最近の発掘調査
府中第八小学校で鎌倉時代の遺跡を発見！
- 7 府中の史料に見る 江戸時代の流行病
④感染力の強い麻疹
- 8 平成史に残る天文・宇宙イベント
⑧誕生！小惑星ムサシフチュウ

1964 東京オリンピックと府中

2020年には本来、2回目となる東京オリンピックが開催される予定でした。残念ながら世界的なコロナ禍によって延期となってしまいましたが、今後への期待を込めて、1回目の東京オリンピックと府中とのかわりを紹介してきました。今回はその最終回です。

その4 府中市民とオリンピックの記憶

50km競歩折返し点は、府中市内の新甲州街道（国道20号線）上、小金井街道との交差点付近に設置されました。当時の写真には、雨天のなか折り返す選手、雨合羽を羽織った警備員、傘をさして応援する人々などが見えます。まだこの一帯に建築物は少なく、緑が残り、右奥には京王線の電線を支える架線柱と思われる柱も確認できます。

1964 東京オリンピックと府中

その 4…

府中市民とオリンピックの記憶

東京オリンピックは、ほとんどが 23 区内を会場としていました。全 20 競技 163 種目のうち、多摩地域で実施されたのはわずか 9 種目です。

自転車競技全 7 種目（10 月 14～20 日）が八王子市をメイン会場とし、そのうちのチームタイムトライアルのみ日野市・立川市・昭島市の 3 市も周回コースに組み込まれました。残り 2 種目は陸上競技で、50 km 競歩とマラソンです。50 km 競歩は、国立競技場から明治通りをいき、新宿で新甲州街道に入り直進、調布市を通過し、府中市内の同街道上に折返し点がありました。マラソンも似たコースですが、50 km 競歩より約 8 km 短いので府中市まで至らず、調布市内にある現在の東京スタジアム（味の素スタジアム）前が折返し点で、府中市と調布市の聖火リレー中継点と同じ場所でした。なお、会期前の 4 月 12 日には 50 km 競歩、マラソンそれぞれの日本代表選手最終選考大会が同じコースで開かれています。

50 km 競歩が行われた 10 月 18 日は日曜日でしたが、府中市内を聖火ランナーが走った日と同様、雨が降っていました。トップの選手が府中市内の折返し点を通過したのは午後 2 時 20 分頃。日本からは 3 選手が出場しており、江尻忠正選手の 22 位が最高でした。沿道の人出は比較的少なかったと思われますが、それでも当時の報道では府中市内だけで約 3 万 5 千人の観衆がいたとされています。

その 3 日後、陸上競技最終日の 10 月 21 日、調布市を折返し点として行われたマラソンは当時も人気種目でした。平日にも関わらず調布市内で 15 万人以上が観戦したといわれています。学校団体の観戦も行われました。当時府中市内の中学生で、この日学校行事として折返し地点付近まで団体で行き、最終的に 3 位入賞となった円谷幸吉選手を生で見たという思い出を持つ方もいます。競歩にせよ、マラソンにせよ、新甲州街道をオリンピック選手が通過したことは、府中市民



国道 20 号線上にある 50 km 競歩折返し点の標識（左上）と記念碑（右下）。

にとって強く記憶に残る出来事でした。

記憶だけではなく、それを記録するものも残されています。オリンピック終了から 2 年後の 1966 年（昭和 41）6 月、「オリンピック東京大会 50 キロ競歩折返し点記念碑」が市営球場（現 寿町の市民球場）に建てられ、序幕式が行われました。この記念碑は、競歩のコースから外れた場所にありましたが、1972 年（昭和 47）、本来の折返し点付近（現 緑町）に移設されました。現在では、自動車でも通過しても分かりやすいように「50 km 競歩折返し点」と記された大きな標識が別に立っています。そちらのほうが馴染みがあり、その袂に記念碑があることを知らない人もいるかもしれません。

ところで、次回東京オリンピックの 50 km 競歩は、マラソンとともに北海道札幌市が予定会場です。全長 20 km の周回コースが採用され、折返し点は存在しません。しかも、この大会を最後に 50 km 競歩はオリンピックの種目から外れ、距離が短い競歩種目が新設される予定です。つまり、今後も府中市は、「オリンピック種目として、50 km 競歩の折返し地点が設置された国内唯一の場所」であり続けるのです。（佐藤智敬）

府中の都市動物 BLACK LIST ③



糞害に憤慨？

コロナ禍^かにあって、オンラインという新たな通信手段^あが注目を浴びましたが、電話や電報で育った昭和世代には驚くべきテクノロジーです。それ以前の通信手段^あと言え、文書による伝達ですが、ある動物がメッセンジャーとして使われていました。それはヨーロッパやアジアに分布するカワラバトで、その昔、人が飼育し、観賞用・食用等に改良を重ねていた鳥です。何よりも伝書バトとしての能力が見出され、脚^{あし}に手紙を結び付けられては、目的地へと飛ばす運び屋として利用されていたのです。今思うとかなり原始的な通信手段とも思えますが、彼らの帰巢本能^{きそうほんのう}を利用した巧妙な方法^{こうみょう}でした。またレースバトとしても調教され、強く速く飛翔能力^{ひしやう}を磨いた個体も活躍していました。

さて、次第にこの中から、はぐれ者や途中で任務放棄^{むぼうき}する裏切り者が発生しました。これらは野生化^{はいせい}し、その他の野生ハトと交配を繰り返したことで、ついに雑種^{ざっしゆ}のハトが誕生したのです。いわゆる野良バト^{のら}ですが、古くから日本でも見られ、時代と共に家鳩^{いえばと}、塔の鳩^{とう}、堂鳩^{どうばと}、土鳩^{どばと}と呼び名を変えながら、現在はドバトの名で知られるようになりました。我々が神社の境内^{けいだい}や駅の構内^{かみ}などで頻繁に姿を目にするハトは、実はこれなのです。

ドバトは、都市で人に依存しながら堂々と活動を続けています。今や都市に生息する当り前のハトになり、足元に寄って来ればつつい工サを与えてしまう程に人の好感を得ているようです。神社などに棲みつ^すくことが多く、霊魂^{れいこん}の象徴^{しやうちゆう}とか平和の使者^{しや}とか祀り上げられながら、参拝者^{さんぱい}から絶えることなく給餌^{きゅうじ}を受け繁栄^{はんえい}してきました。際立った例は、都心の靖国神社^{やすくに}で鳩舎^{きゆうしや}を設け飼育されている白いドバトです。愛鳥家^{あいとうか}から奉納^{ほうなう}されたハトを純白種^{じゆんぱくしゆ}に改良したもので、神の使いに見立てられながら、参拝者^{さんぱい}にもてはやされています。朝に鳩舎^{きゆうしや}から放鳥^{ほうとう}され、夕刻には再び戻ると言う日常で、まさに管理下に置かれながら貴重^{きゆうじゆう}に扱われるドバトと言って良いでしょう。

ところがこのドバト、必ずしも平和的^{へいぜい}ではありません。他の野鳥と同様に、工サや営巣場所^{えいそうばしょ}をめぐる争い^{たびたび}が度々見受けられます。さらには増え過ぎたことで、都市で生活する人との関係^{けんあく}が険悪^{けんあく}になっています。その主たる要因^{しゆいん}は糞害^{ふんがい}です。都市の上空を自由に飛び交^かい糞爆弾^{ふんばくだん}を投下^{とうか}するのですからたまったものではありません。先述した神社における扱い^{あひ}とは矛盾^{むじゆん}しますが、一方で迷惑動物^{めいわくどうぶつ}の側面^{あわ}も持ち併せているのです。被害^{あひがい}は参拝客^{さんぱい}の衣服^{いふく}や文化財^{ぶんわさい}にも及んでいるわけですから。

そもそも原種^{げんしゆ}のカワラバトは、岩場や海岸を好む習性^{しゆせい}があり、石やコンクリートで構築^{くわうきゆう}された都市環境^{しゆじゆきやう}は本来^{ほんらい}の生息地^{せいしき}に類似^{るいじ}するものです。1970年代以降、都市に工業地^{こうぎょうち}が広がると共にドバトの居場所^{いばしょ}も増え、すっかり街の重鎮^{じゆうちん}となりました。同じ顔役^{かみやく}にはカラスもいますが、雑食性^{ざっしきやう}で人工物^{たうく}を巧みに利用^{りよう}する生活スタイル^{しゆふすたいる}は共通^{きゆうこう}します。但し、人はカラスに対して嫌悪感^{けんあくかん}を持ち排除^{へいしゆ}の方策^{ほうさく}を考えますが、ドバトには追い払^{はら}うよりも糞害^{ふんがい}を防御^{ぼうえい}する策^{さく}で対応^{たいおう}しています。例えば鳩舎^{きゆうしや}を設置^{ていしや}するいくつかの神社^{しんじや}では、容易^{りゆうい}に糞^{ふん}を洗い流^{なが}せる場所^{ばしょ}の近く^{ちかく}に工サ場^{こうさば}・止まり場^{とまりば}を作り排泄場所^{はいせつばしょ}を制限^{せいげん}、糞量^{ふんりやう}の少ない小麦^{こむぎ}主体^{しゆたい}の工サを配合^{けいばい}、卵^{たまご}を間引^{まひ}いて繁殖^{はんしよく}を制御^{せいぎよ}する、などを行っています。市街地^{しちがいち}では電線^{でんせん}に針金^{はりがね}をスパイク状^{すぱいくじやう}に埋め込み^{うめこみ}、頭上^{かみ}に群れないための対策^{たいさく}が見られます。都市におけるドバトの存在^{そんざい}を否定^{ていぎ}せず、あくまで対症療法^{たいしやうりやうほう}を施^ほすと言う形^{かたち}です。まるで可愛^{あい}がっている子の粗相^{そさう}を叱^{しか}る程度^{ていど}にも思えますが、元^{もと}を辿^{たど}れば人に重宝^{ちゆうぼう}され、奉^{ほう}られ、まさしく都市^{しゆじ}に呼び込まれた鳥^{とり}がドバトです。糞^{ふん}を落とされ憤慨^{ふんがい}するよりも、その動作^{どうさく}に癒^{なご}されつつ工サ^{いさ}を与えて楽しむ対象^{たいさう}と捉^{とら}えるべきなのかも知れませんね。

(中村武史)



府中の都市動物 BLACK LIST FINAL 外来種は善か悪か… 3種の審議



市内の多磨霊園で確認されたワカケホンセイインコ
撮影：影山 昇（府中野鳥クラブ）

先日、府中野鳥クラブが定期観察の折に、当館裏手の多摩川大丸堰付近にて2匹のサルを確認しました。都市開発による生息エリアの減少、近年の温暖化によるエサ不足などで、従来の拠点から移動もしくは放浪する途中だったのでしょうか。こうした様々な影響を受けて、都市に新たな行き場を求める動物が増える中、その大方は迷惑視・敵対視の対象となっています。これとともに問題視されるのが外来種の侵攻です。本来国内に生息しないはずの種が都市で繁殖し、従来の生態系を脅かしているのです。自然界にとっては由々しき事態なのですが、人にとっても迷惑なのでしょうか。府中市内でも確認できる有名な3種を引合いに、度合を計ってみようと思います。

▼ 都市の空に緑の集団・ワカケホンセイインコ

本種は1970年あたりから世田谷区の屋敷林や保存樹林、ケヤキの洞での営巣が確認されました。この鳥は、元来北緯20度以南のインドやスリランカが原産国で、全長40cmにもなる大型のインコです。鮮やかな黄緑の体に赤いクチバシ、首には名の由来でもある黒い輪模様があります。見た目にもエキゾチックな南方系の鳥が住宅地に群れたのは、人が持ち込んだからでした。鮮やかさと丈夫さを売りに、古くから世界各国

に輸出されていたのです。

発端は世田谷区のペットショップから百数十羽の若鳥が脱走したことでした。その後は区内各所の庭先・神社・公園の高木を根城にその数が増えていったという経緯です。1980年以降は、さらに増加して千葉や埼玉などにも広がりました。現在では東京に千羽以上が生息し、名古屋や大阪などでも確認されています。そもそも熱帯産のインコが都市に定着したのは、百羽単位で逃げ出したため、地域内で繁殖可能な仲間の数が満たされていたからです。さらに、彼らは草食性で、樹木の蕾・花・果実・葉・冬芽など、植物であれば何でも食べます。都市にはこれらを満たす樹木や緑地が意外に揃っており、採食に好条件であったことも幸いしました。また、大型種であるため熱帯産の割には寒さに強く、かつ都市のヒートアイランド化がもたらす気温の引き上げが冬越しに有利に働いたものと考えられます。以前から、観賞用に輸入した別の熱帯産鳥も何種か籠脱けしていますが、ほとんどが数年で消滅するか細々と暮らすかの結末となっています。本種は四半世紀を過ぎて尚増加を続ける異例種と言えるでしょう。彼らは、庭木や街路樹に被害を与えます。硬いクチバシで花や芽をかなり乱暴に食べ、幹に

穴を開け、洞を拡張し、樹木の成長に悪影響を及ぼすのです。樹洞を住処にするフクロウなどの繁殖場所を奪う脅威にもなりました。

ところが不思議なことに、人から嫌がられることもなく、むしろあまり直接的な関係を持ちません。多少の浸食はあっても在来種との目立った抗争を耳にすることもありません。何となく都市に溶け込んでしまっているのが実状です。少なくとも人に対しては、取り立てて日常的な迷惑が無い存在のようなのです。

▼ 都市の川に黒の侵略・ブラックバス

続いては水中のならず者ブラックバス。北米産の淡水魚で、大型のオオクチバスや小型のコクチバスなどの総称です。特徴は肉食で攻撃的、獲物を貪欲に丸飲みしてしまいます。魚はもちろん、甲殻類や両生類、果てはネズミまで食べていることもあります。現在日本各地の川や湖に拡散し、在来種に打撃を与えるアウトローと化しています。これも人為的放流が発端です。1925年、ある実業家がアメリカ留学中に会ったオオクチバスを水産資源として持ち込みました。食用に養殖する目的で、箱根の芦ノ湖を限定に放流したのです。ところが、1970年代後半にブームとなったルアーフィッシングの対象魚として注目が集まり、移動・放流が頻繁に行われた末、1999年までに全国47都道府県へ広がってしまいました。他の放流魚への混入や、水系を通じて分散することもありましたが、大半は人が運んだ結果です。各地における在来種への駆逐行動は今や大問題となり、すでに環境省の特定外来生物に指定されています。国内へは持ち込まない、釣り上げたら川に戻さないルールです。しかし、釣り愛好家にとっては煙たい

決定で、ブラックバス排除の動きに対して異議を唱える者が多い現実もあります。場所によっては駆除対策を進める漁協に脅迫まがいの文書が送り付けられることもあったようです。生態系を脅かすお尋ね者である一方で、これまた迷惑を感じる人は少なく、むしろ一部で好感度の高い微妙な立ち位置と言えましょう。



オオクチバス



コクチバス

▼ 都市の闇に白の紋章・ハクビシン

猫ほどの大きさで尾は長く、頭から鼻先へ1本の太く白い筋が通ることから「白鼻芯」。中国・台湾・インドなどに分布する夜行性の動物です。1943年に国内で初捕獲され、毛皮用に飼育されていたものが野生化したとか、東南アジア航路の船員がペットにしていたものが逃げ出したとか、諸説唱えられました。近年全国各地に出没し、優れた跳躍力で住宅の屋根裏に侵入、果物に目が無いことから果樹園での食害など、まさにブラックリストの筆頭です。但し、アライグマなどとは



違い、外来生物法が適用されず、鳥獣保護法に守られ、自治体の許可なく捕獲することができません。実はハクビシン、古くは江戸時代に「雷獣」として記録されていること、頭骨を比べると中国や台湾産とは形状が異なることなどから在来種ではないかとする指摘があり、論争が続いているのです。現状では外来種の域を脱しませんが、仮に在来種だとすれば、タヌキなどと変わらない都市侵攻動物であり、生態系の根幹に支障を来す侵略者ではないこととなります。人への有罪は動きませんが、自然界では逆転無罪の目が出ないとも限らない未だ容疑の範疇と言ったところなのです。

外来種の拡散は確実に生態系を攪乱します。今回の3種についても同様です。但しこの3種に対する人の受取り方は三者三様。在来だろうが外来だろうが、目前の都合で善悪が決まるようです。しかし真の問題は生物間の安定した繋がりを損なうことで、それは生態系的一端を担う我々も無関係ではありません。人は斜めから自然を見ている節がありますが、本質を理解した正しい自然観を身に付けなければ、外来種はさらに増えていくでしょう。迷惑の根は人に有りなのかも・・・？

最近の発掘調査

府中第八小学校で

鎌倉時代の遺跡を発見！

是政一丁目 府中市ふるさと文化財課 湯瀬 禎彦



西側の柱穴群

府中市の地形は、市内を東西に走る府中崖線^{がいせん}の北側の台地と、南側の低地に大きく分かれています。府中市では1975年以来、1870か所を超える発掘調査を行っていますが、そのほとんどを台地で行っているため、低地にある遺跡のあり方は一部の地域を除きわかっていません。こうしたなかで昨年、是政の一角に建つ、府中市立府中第八小学校で新たに遺跡が発見され、新たな情報が得られました。

発見された遺跡は東西約80m、南北約23mの範囲に広がり、西側に約400基の柱穴、東側に水田遺構が分布していました。西側では規則的に並ぶ柱穴が数多く確認され、ここには複数の掘立柱建物で構成された居住施設が置かれていたようです。また、東側の水田遺構では水田特有の耕作土層^{とこつち}と床土層がセットで確認され、科学分析によりイネの痕跡^{こんせき}も検出されました。さらに、この遺跡からは、カワラケと呼ばれる素焼き土器をはじめ、常滑焼き陶器や中国（南宋）から輸入された青磁^{せいじ}と白磁^{はくじ}など、いずれも鎌倉時代の遺物が出土しています。これらの情報から、この遺跡は鎌倉時代における居住地と生産地が隣接した場所^{ところ}と捉えることができます。

では、この居住地にはどのような人が暮らしていたのでしょうか。出土遺物の青磁と白磁に注目すると、どちらも当時一般には入手が困難な貴重品であり、その所有者が庶民とは考えられません。おそらく、この居住地には武士や土豪といった地域の有力者が暮らし、その配下の農民が米作りを行っていたのでしょうか。

今回新たに発見された遺跡は、市内で初めての確認例となる鎌倉時代の水田遺構を含むものでした。そして、市内の低地のなかには、まだ知られていない重要な遺跡が埋まっていることを改めて示すものでした。今後、市内の低地における発掘調査の進展により、府中の歴史をさらに解明する遺跡の発見が期待されます。



出土した中国製の青磁（上）と白磁（下）

府中の史料に見る 江戸時代の流行病

④感染力の強い麻疹

江戸時代の川柳に「麻疹で知られる傾城の年」という一句があります。「傾城」とは遊女のことですが、なぜ麻疹が原因で年齢がばれてしまったのか、今回はその理由からお話ししましょう。

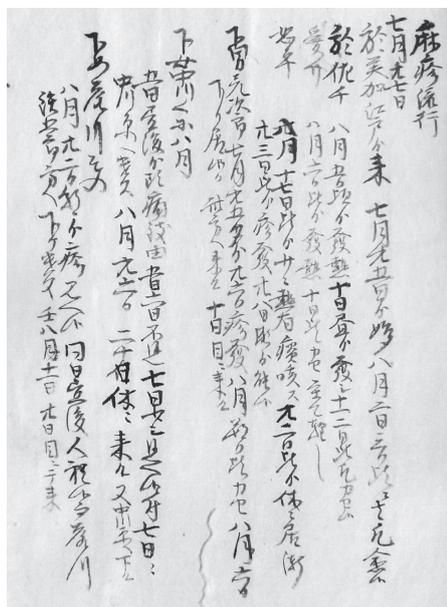
麻疹は、まず咳や38度前後の発熱があり、一旦下熱、その後再度の高熱とともに赤い発疹が現れ、その色が薄くなると快方に向かう病気です。疱瘡と同様に、感染すると終生免疫ができ二度とかかることはありませんが、江戸時代、疱瘡が数年おきに流行を繰り返していたのに対し、麻疹は20~30年スパンだったと言われています。

麻疹の流行周期が長い原因は、その感染力の強さにあります。空気感染するうえに、発疹が見られる以前から感染力がアップし、1人が何人にうつすかという「実効再生産数」は10人以上に及びます。つまり、一度流行すると大勢の人が一気に感染し免疫抗体を持つので、未感染者が増えるまで次の流行は起きないのです。

これで冒頭の川柳の意味はだいたいお分かりでしょう。そう、例えば30年ぶりに麻疹がはやったとします。感染が広がっていく中で、ある遊女には感染しない。そのため30歳以上であることが、周りに知られてしまったというわけです。

流行周期の長さは、感染者の年齢層の厚さにも繋がります。麻疹は大人になってかかる人もいて、その場合は子どもより症状が重くなる傾向にあるようです。江戸城の奥深くで守られた五代將軍綱吉が、63歳にして麻疹に罹患し、それが原因で死亡したことは良く知られています。流行頻度が低いので、医師の治療経験も乏しく、栄養状態が悪いと肺炎などを併発して死に至りました。これが、江戸時代に「麻疹は命定め」と言われていた所以です。

それでは江戸時代後期の府中近辺における麻疹流行について、住吉町の旧家・内藤治右衛門家に残る日記から見てみましょう。ここには、享和3年(1803)と文久2年(1862)の流行が記録されています。この間約60年、江戸では流



文久2年の麻疹流行を記した日記

行した年もあるようですが、この辺りには及ばなかったのかもしれない。

享和3年の麻疹は4月末に始まり、6月中旬から治右衛門家でも感染者が出始めました。この中には日記をつけていた本人(20歳男性)も含まれており、5日程度で平癒しています。ここには家内の男女4人全員が罹患したとありますので、やはり感染力が強かったことがわかります。

一方、文久2年は七夕頃から流行し、閏8月下旬まで続きました。7月25日から感染者が現れ始めた治右衛門家では、家族4人と奉公人3人が罹患し、奉公人は発疹が出ると宿下りをさせています。当時病気になるると親元に帰ることが通例だったのかもしれませんが、このような移動によって麻疹の流行がさらに広がっていったことは想像に難くありません。

文久2年という年は、麻疹の流行に加え、8月に入るとコロリ(コレラ)の流行が始まります。久しぶりの麻疹と未だ新顔のコレラがダブルで襲ってきたわけですから、当時の人々の恐怖はいかばかりだったことでしょう。さまざまなまじないや祈祷・祈願を通してこの悪疫から逃れようとするのですが、そのお話は次号以降で紹介していきたいと思います。(花木知子)

平成史に残る天文・宇宙イベント



⑧誕生！小惑星ムサシフチュウ



平成 29 年（2017）4 月 13 日、府中の名を冠した星が誕生しました。「小惑星 Musashifuchu（ムサシフチュウ）」です。当時、複数の新聞に取り上げられたので、記憶にある方もいらっしゃるかもしれません。

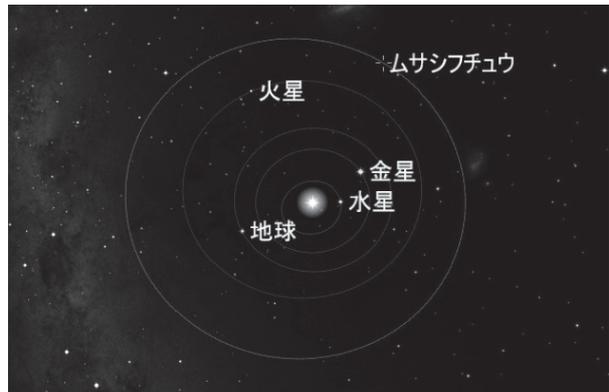
小惑星ムサシフチュウは平成 12 年 8 月、岡山県にある日本スペースガード協会により、うお座付近を観測中に発見されました。「41481 番」と番号が付けられたその小惑星は、火星と木星の間であって、約 3 年 4 か月をかけて太陽の周りを 1 周します。大きさは直径約 2.7km と小規模な天体です。小規模といっても、府中市で例えば、当館から北府中駅までスッポリと覆うことができる大きさです。

幸運なことに、当館ではこの小惑星 41481 番の命名を委ねられることとなり、平成 28 年、府中市民の皆さんから「府中にちなんだ名前」を公募しました。その結果、127 件のご応募をいただき、その中から府中にふさわしい「Musashifuchu（武蔵府中）」を選びました。府中は奈良・平安時代、「武蔵国」の役所である「国府」の所在地で、鎌倉時代からは「府中」と呼ばれるようになりました。つまり、「Musashifuchu」とは、府中市の歴史と文化を象徴する名前なのです。このムサシフチュウという名称は、日本スペースガード協会を通じて国際天文学連合へ提出、平成 29 年 4 月 13 日に公式決定され、ついに「小惑星 Musashifuchu」が誕生します。同年 6 月 11 日に行われた命名の伝達式では命名伝達書が授与されました。命名伝達書は当館の天文展示コーナーで展示中です。ぜひご覧ください。

そもそも小惑星とはどんな天体なのでしょうか。小惑星は、私たちの地球と同じように太陽の周りをまわっている、太陽系の天体です。太陽系の天体のうち、惑星・準惑星・衛星・彗

星以外の天体のことを小惑星と呼びます。今までに見つかっている小惑星は、軌道が未確定のものも含めればなんと数十万個。その大部分は火星と木星の間にあり、この領域を「小惑星帯」と呼びます。ムサシフチュウも「小惑星帯」の天体です。太陽系が生まれて間もないころ、「小惑星帯」のエリアでは他の惑星の重力の影響で、惑星に育つはずの塊が激しく衝突して破壊され、惑星として成長できなかつたと考えられています。そのため、太陽系誕生時の物質の情報を今も保存しているのではと期待されているのです。これを採取して地球へ持ち帰ろう、というプロジェクトが小惑星探査機「はやぶさ」や「はやぶさ 2」です。はやぶさ 2 が持ち帰ってきた「小惑星リュウグウ」のカケラは鋭意解析中。どのような太陽系誕生の秘密が解明されるのか、続報が楽しみです。

ムサシフチュウは地球と同じ太陽系の天体ですが、遠くて小さいため、夜空を見上げて目で見えることは難しい暗い星です。でも確かにそこに存在して、星座を形作る星々の間を渡り歩くように移動しています。今年の 3 月～4 月中旬は日没後の西の空、おひつじ座の方向にあります。ぜひ空を眺めて“宇宙にある府中”に思いを馳せてみてください。（相澤南美）



2021 年 4 月 13 日太陽系の中でのムサシフチュウの位置
提供：ステラナビゲータ 10 / (株) アストロアーツ